



2024年10月「福島県地球温暖化防止活動推進員の会」(県北地区)活動報告

10月6日「2024ふくしま環境フェスタ」が「まちなか広場」と「まちなか交流施設ふくふる」で開催されました。今回は「環境都市ふくしま市～未来へつなぐふくしまエコリレー」をテーマに、福島県地球温暖化防止活動推進センターをはじめ、市内の大学や福島气象台、福島ガス(株)、東北電力(株)、福島日産自動車(株)を含む17ブースが出展しました。

当団体では、地球温暖化防止のために実践していることについてシールを貼ってもらう企画コーナーや、「地球温暖化防止かるた」と「エコかるた」の体験コーナーを設置したほか、推進員レターや環境アプリのチラシ、冷蔵庫の整理術に関する資料を配布し、ブース全体で180人もの皆さんにお越しいただき、大変賑わいました。

その他、ステージでは、平石小学校7名の児童による「豊かな自然を守るために～環境問題(ごみ問題・地球温暖化など)の現状と対策～」の発表のほか、カンキョーズによる漫才を取り入れた環境ゼミナ



地球温暖化防止かるたを取る参加者(上)とふくしま環境フェスタに参加した福島県地球温暖化防止活動推進委員のメンバー(下)

ールが行われました。また、会場内のブースを周りながら、スマートフォンを活用したクイズラリーに挑戦し、最後はガラポンに挑戦する企画も行われ、会場は活気と笑顔に満ち溢れていました。

IPCC第6次評価報告書ワーキングII 第16章:セクター・地域別の主要リスク

この章では、これまで観測された気候変動の影響、それに対する適応策とその限界、さらに、地域特性などについてまとめられています。図1は地域別に予測される気候影響要因、持続可能な開発目標、および主要リスクとの関連性を示しています。これまで紹介してきた地域がまとめられているので少し複雑です。

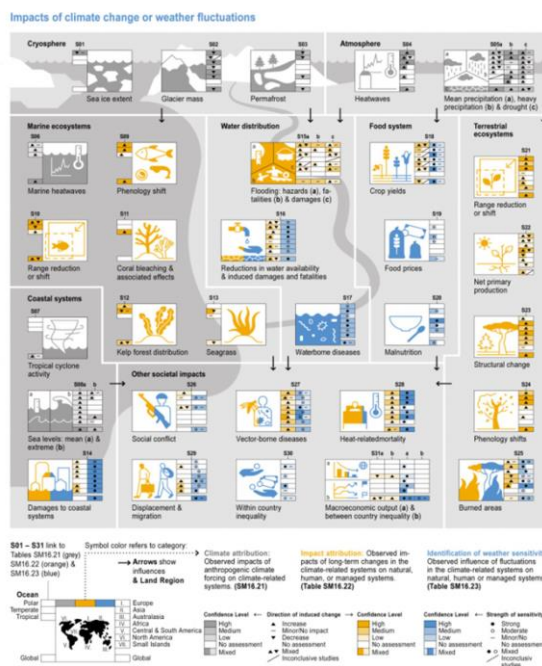


図1 気候変化や天候の変動による影響

まず、「雪氷圏の変化(S01からS03)」を例に図の各項目を説明します。雪氷圏の変化には、S01:海氷の分布、S02:氷河の質量、S03:永久凍土が示されています。また、それぞれの図には左や右に欄がありますが、左欄は上から寒帯域、温帯域、全球を表していて、それぞれのセルの色の濃さや矢印の向きは、信頼の度合い(色が濃いほど高い信頼度)や変化傾向(矢印の上向きが増加・上昇を、下向きが減少・下降)を示しています。また、右欄は上からヨーロッパ、アジアといった地域(詳しくは図1の左下を参照)を表していて、こちらもセルの色の濃さや矢印の方向によって、信頼度や変化傾向を示しています。例えば、S01:海氷の分布では、寒帯域で減少を示していますが、その他の地域及び全球では評価がありません。また、S03:永久凍土ではヨーロッパ、アジア、北アメリカ地域で減少傾向の評価が示されています、といったように項目ごとに地域における気候変動などの影響が表されています。

同様に、図1上段右側は「大気的事象」で、S04:熱波、S05:平均降水量(a)、大雨(b)、干ばつ(c)を示しています。図1中段左側は「海洋生態システム」であり、S06:海洋熱波、S09:生物季節(生物の季節的な応答)のシフト、S10:生息域の縮小やシフト、S11:サンゴの白化とその影響、S12:昆布林の分布、S13:海藻を示しています。また、図1中段左から2つ目は「水環境」で、S15:洪水の危険性(a)、死亡者(b)、損害(c)、S16:水資源の減少に伴う被害及び死亡者数、S17:水媒介性疾患を示しています。図1中段右から2つ目は「食料システム」で、S18:作物の収穫量、S19:食品価格、S20:栄養失調を示しています。図1右側は「陸上生態系」で、S21:範囲の縮小とシフト、S22:純1次生産(植物が光合成により大気中の二酸化炭素を固定し生産する有機物の量)、S23:構造変化、S24:生物季節のシフト、S25:焼失領域を示しています。図1下段左側は沿岸システムで、S07:熱帯低気圧の活動、S08:平均的な海面変動(a)や極端な海面変動(b)、S14:沿岸システムの被害を示しています。最後に、図

1下段中央は「社会的影響」でS26:社会的対立、S27:媒介動物による感染、S28:熱中症による死亡率、S29:避難と移住、S30:国内の不平等、S31:マクロ経済生産(a)と国家間の不平等(b)を示しています。

また、これらのカテゴリーの関連性を表す矢印に着目してみると、雪氷圏の変化は海洋生体システムと水環境に関連しているほか、大気的事象は、水環境、食料システム、及び陸上生態系に関連しています。また、海洋生態システムや水環境、食料システムは社会的影響とも関連しているので、雪氷圏の変化や大気的事象もまた、社会的影響に関連するという点でもあり、気候変化が広範に社会的影響をもたらすことが理解できます。

こうした気候変化に対する適応タイプを示したのが図2です。具体的な方策が示されているわけではありませんが、適応策を技術的・インフラ的適応策(青線)、制度的適応策(黒線)、行動的・文化的適応策(赤線)、自然に基づく適応策(緑線)の4つに分けて、7地域でどのような割合で対応しているかを記事の割合で示しています。

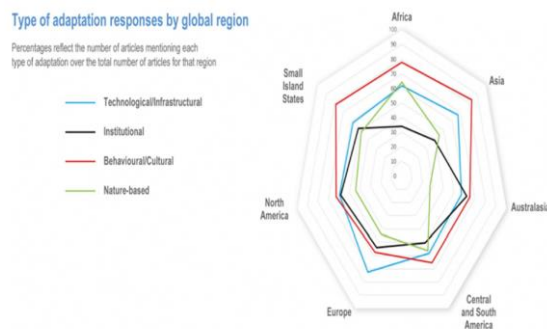


図2 世界地域別の適応対応のタイプ
パーセンテージは、各適応タイプに言及している記事の数を、その地域の記事総数で割ったものを

アフリカなどは行動的・文化的適応策が多いのに対して、ヨーロッパでは技術的・インフラ的適応策が多く示されています。すなわち、先進国では科学技術力で適応策を行っているのに対して、資金が少ない途上国では国民の生活の中で工夫した適応策を文化として対応し続けようとしており、自然を基本にした適応策が、持続的な手法として用いられています。